ユネスコ無形文化遺産登録

尾張津島天王祭

こんなに素晴らしい祭文化

ＷＥＢ版

著者：浅井厚視・黒田剛司
発行：信長の台所歴史検定「津島の達人」実行委員会

はじめに

平成２８年１１月３０日（日本時間１２月１日未明)、エチオピアの首都アディスアベバで開かれた国連教育科学文化機関（ユネスコ）の政府間委員会は、日本が無形文化遺産に提案していた「山・鉾・屋台行事」の登録を決定しました。日本の登録は 2014 年の「和紙」以来２年ぶりで、国内の無形文化遺産は計２１件となります。

「山・鉾・屋台行事」（国重要無形民俗文化財）は以下の祭礼です。なお、「日立風流物」と「京都祇園祭の山鉾行事」は既に、ユネスコ無形文化遺産になっています。

・八戸三社大祭の山車行事（青森県八戸市）
・角館祭りのやま行事（秋田県仙北市）
・土崎神明社祭の曳山行事（秋田県秋田市）
・花輪祭の屋台行事（秋田県鹿角市）
・新庄まつりの山車行事（山形県新庄市）
・日立風流物（茨城県日立市）
・烏山の山あげ行事（栃木県那須烏山市）
・鹿沼今宮神社祭の屋台行事（栃木県鹿沼市）
・秩父祭の屋台行事と神楽（埼玉県秩父市）
・川越氷川祭の山車行事（埼玉県川越市）
・佐原の山車行事（千葉県香取市）
・高岡御車山祭の御車山行事（富山県高岡市）
・魚津のタテモン行事（富山県魚津市）
・城端神明宮祭の曳山行事（富山県南砺市）
・青柏祭の曳山行事（石川県七尾市）
・高山祭の屋台行事（岐阜県高山市）
・古川祭の起し太鼓・屋台行事（岐阜県飛騨市）
・大垣祭の軸行事（岐阜県大垣市）
・尾張津島天王祭の車楽舟行事（愛知県津島市・愛西市）
・知立の山車文楽とからくり（愛知県知立市）
・犬山祭の車山行事（愛知県犬山市）
・亀崎潮干祭の山車行事（愛知県半田市）
・須成祭の車楽船行事と神葭流し（愛知県蟹江町）
・鳥出神社の鯨船行事（三重県四日市市）
・上野天神祭のダンジリ行事（三重県伊賀市）
・桑名石取祭の祭車行事（三重県桑名市）
・長浜曳山祭の曳山行事（滋賀県長浜市）

・京都祇園祭の山鉾行事（京都府京都市）
・博多祇園山笠行事（福岡県福岡市）
・戸畑祇園大山笠行事（福岡県北九州市）
・唐津くんちの曳山行事（佐賀県唐津市）
・八代妙見祭の神幸行事（熊本県八代市）
・日田祇園の曳山行事（大分県日田市）

愛知県の「山・鉾・屋台行事」に該当する国重要無形民俗文化財は５件もあります。

「尾張津島天王祭の車楽舟行事」（昭和５５年国指定）、「知立の山車文楽とからくり」（平成２年国指定）、「犬山祭の車山行事」（平成１８年国指定）、「亀崎潮干祭の山車行事」（平成１８年国指定）、「須成祭の車楽船行事と神葭流し」（平成２４年国指定）の５件です。愛知県の中では、「尾張津島天王祭の車楽舟行事」が最も早く国重要無形民俗文化財に指定されています。

海部津島からは２件あります。「尾張津島天王祭の車楽舟行事」「須成祭の車楽船行事と神葭流し」です。ともに、かつての祭神牛頭天王の神社祭礼です。

ユネスコ無形文化遺産に「尾張津島天王祭の車楽舟行事」が登録されることは、津島市の伝統文化の価値や魅力が高く評価されたものと考えられます。津島市の全国へのアピールになるとともに、市民のふるさとの歴史と文化に対する再認識につながることが期待されます。

津島牛頭天王社の祭礼

祭には、神社の祭神に何かを祈願するという目的があります。したがって、その祭神のご神徳、神威すなわち御利益（ごりやく）を知ることによって、本来は何を祈願していた祭であったかが分かります。

中世以来、津島神社は津島牛頭天王社（つしまごずてんのうしゃ）あるいは津島天王社と呼ばれ、牛頭天王（ごずてんのう）を祭祀していましたが、明治政府の神仏分離令により、明治２年（1869）に「津島神社」と改称しました。

津島牛頭天王社は、疫病退散の御利益で全国的な信仰を集めていました。尾張津島天王祭は、津島牛頭天王社の祭礼でした。したがって、津島牛頭天王社と祭神の牛頭天王を知ることは、尾張津島天王祭が夏に行われる目的などを知ることにつながります。

今から 840 年前の『七寺一切経(ななつでらいっさいきょう)』(七寺、名古屋市中区大須 2）の内、承安５年（1175）に書き写された「大般若経（だいはんにゃきょう)」の巻末印記に「津嶋」と記されていたことから、当時の「津島社」は伊勢内宮・外宮、白山妙理権現、熊野三所大神社、山王三聖（日吉大社)、南宮大社（美濃国一宮)、多度大社とともに有数の大社となっていたことがわかります。

１３世紀以降、津島社は大きく発展しました。それは、牛頭天王を祭神とする神社であったためです。中世の社会において、疫病（えきびょう）の流行は飢餓とともに、最も恐れられたものでした。疫病退散の神社は、京都の祇園社（ぎおんしゃ）以東では、津島牛頭天王社が最も有名でしたので、村々では津島牛頭天王社を勧請して分霊社を建立し、村に疫病が流行しないことを祈願しました。現在、全国に津島神社の分霊社・末社は約 3000 社あり、分霊社の

数では、全国の大社の８位となっています。

戦国期には織田信長のみならず、豊臣秀吉・秀頼も津島牛頭天王社への信仰が深く、多大な寄進をしています。

織田信長が弘治４年（1558）に尾張津島天王祭を見物に訪れた古記録も残っています。また、織田家と津島牛頭天王社は同じ「木瓜紋（もっこうもん）」です。

津島神社の国重要文化財の楼門（ろうもん）は、豊臣秀吉が母の大政所の病気平癒を願って寄進したものです。本殿（国重要文化財）は、徳川家康の４男である松平忠吉（清須城主）の妻 政子の平癒祈願によって寄進造替されました。共通しているのは病気平癒のためということです。いかに津島牛頭天王社が疫病退散、病気平癒のご神徳により、中近世に信仰されていたかが分かります。

津島牛頭天王社境内図（江戸時代後期）

明治元年（1868）、明治新政府の「神仏分離令」により、神宮寺の「本地仏（ほんぢぶつ）」（薬師如来）の撤去、鰐口（わにぐち）、梵鐘（ぼんしょう）、仏具・経典など仏教に関わる物すべてが境内から撤去されました。そして、明治２年（1869）に津島牛頭天王社から「津島神社」と改称しました。祭神は建速須佐之男命（たけはやすさのおのみこと）で、大己貴命（おおなむちのみこと）を配祀しています。

祭神牛頭天王と祭礼

津島神社が津島牛頭天王社と称していた時代の祭神は牛頭天王でした。この牛頭天王はいかなる神であったのでしょうか。

平安時代には、朝廷の政争に敗れて怨みをもって死んでいった貴人が祟って疫病（えきびょう）、雷や火事を起こすものと信じられていました。この怨霊（おんりょう）を鎮める儀式が御霊会（ごりょうえ）です。御霊会の儀式では仏教経典の読経とともに、歌舞音曲や民衆参加の踊りなども行われました。

平安時代の初期、桓武天皇の時代に全国各地で疫病が流行しました。これは怨霊の祟り（たたり）であるとされ、貞観５年（863）に神泉苑において御霊会が行われました。この時に慰霊された御霊は崇道（すどう）天皇・火雷神の菅原道真ら７人でした。

平安時代には京都の祇園社（ぎおんしゃ）（現 八坂神社）の祭神牛頭天王は「祇園天神」と称され、荒ぶる神として京の人々から畏怖されていました。祇園祭は祇園御霊会とも呼ばれていました。このように御霊会に起源をもつ牛頭天王系統の祭は、牛頭天王の荒ぶる魂を鎮め、慰める目的で行われました。

祭神の牛頭天王は疫病退散（えきびょうたいさん）の神です。中世の牛頭天王を祀る大社には、祇園社（京都、現 八坂神社）、津島牛頭天王社（愛知、現 津島神社）、廣峯牛頭天王社（兵庫、現 廣峯神社）などがあり、なかでも祇園社と津島牛頭天王社が二大神社で

「西の祇園社、東の津島社」とも称されました。津島牛頭天王社は牛頭天王信仰の聖地だったのです。

津島牛頭天王神像（興禅寺）

疫病は牛頭天王の荒魂（あらみたま）すなわち、荒ぶる神が起こすと信じられていたため、当時の人々は、荒ぶる神が優しい神（和魂 にぎみたま）になれば、疫病は起きないと考えたのです。そのために牛頭天王を慰撫しようとします。その方法は読経、歌舞、音曲、走り馬などでした。

疫病（伝染病）の多くは暑い夏に発生します。夏に疫病が起らず、人々が無事に過ごすことを祈るために、全国の牛頭天王を祀る神社では夏の祭礼が行われるようになりました。牛頭天王を喜ばせ、楽しませれば、優しい神となり、疫病を流行させないと信じられていたのです。

京都の祇園社の祇園祭のように、都市部では山鉾（やまぼこ）や山車（だし）、屋台（やたい）を華麗に飾り、行列や歌舞をともなう風流（ふりゅう）が行われ、華美を競いあいました。尾張の津島でも華麗な天王祭が行われるようになったことから、町衆の経済力が京と同じくらいに豊かであったことが分かります。

祇園祭と尾張津島天王祭は、日本の各地で行われている夏祭の様式に大きな影響を及ぼしたといえます。

尾張津島天王祭の祭様式

尾張津島天王祭は「津島のお天王さま」とも呼ばれた津島牛頭天王社の祭礼であり、陰暦６月１４日に宵祭、１５日に朝祭が行われていました。現在は７月第４土曜日と翌日曜日に行われています。

京都の祇園祭では山鉾巡行が陸上で行われます。一方、尾張津島天王祭は川が舞台で、水上に舟を浮かべて行います。それは、津島が鎌倉時代から伊勢と尾張を舟でつなぐ湊町だったからです。また、津島の昔人が、車楽（だんじり）を舟に載せるという独創的な発想を持っていたことがうかがえます。中世に厳島神社（いつくしまじんじゃ）の管絃祭（かんげんさい）のように御座船として神輿（みこし）を船に載せて渡御（とぎょ）することはありましたが、川を漕ぎ進む車楽舟は例のないことでした。

尾張津島天王祭は、その主宰者という観点から大別すると、７月第４土曜日（陰暦６月１４日）の夜に津島五ヶ村が行う「宵祭（試楽）」、翌日（陰暦６月１５日）の朝に市江（いちえ）と津島五ヶ村が行う「朝祭」、朝祭が終わった深夜（陰暦６月１６日深夜）に神社が行う「神葭（みよし）流し神事」の３つの行事・神事からなっています。尾張津島天王祭の宵祭・朝祭は、氏子である町方衆（まちかたしゅう）が疫病退散・病気平癒のご神徳を願う祭礼です。神職による神葭流し神事は、疫病をもたらす疫神・悪神を神葭に憑けて川に流し去る神事といえます。

宵祭には、津島五ヶ村の米之座（こめのざ）・堤下（とうげ）・筏場（いかだば）・今市場（いまいちば）・下構（しもがまえ）から数多（あまた）の提灯を飾った巻藁舟（まきわらぶね）５艘が出ます。市江は出船せず、星宮（ほしのみや）で試楽（しがく）を行います。市江は津島

から南に４㎞に位置する地域で、市江７ケ村とも称しました。

朝祭には津島五ヶ村の車楽舟(だんじりぶね)５艘と市江から１艘、あわせて６艘が出されます。江戸時代以前から市江の車楽舟が津島の車楽舟５艘の先に漕ぎ進む定めです。

津島牛頭天王社の神官であった真野時綱（まのときつな）が著した『尾州津島天王祭記』（正徳２年（1712））には「この六月の船祭は悉く橋越の神民地士の神勤にして、神家は唯神前の神輿を奉飾し、十四日時丑の神餞のみを勤むる」と記されているように、尾張津島天王祭の宵祭と朝祭は氏子（うじこ）が担い手です。この伝統は今も変わらず、尾張津島天王祭協賛会と市江車協賛会が祭の担い手です。

尾張津島天王祭では祭舟を単に「車（くるま)」と呼び、市江車、津島五車とも呼びます。

尾張津島天王祭の市江と津島五ヶ村の祭の主宰者・世話人は「車屋（くるまや)」と呼ばれます。江戸時代の車屋は、尾張津島天王祭期間中は苗字帯刀が許されました。津島五ヶ村の今市場・筏場・下構・堤下・米之座の車家は有力者（庄屋格・町年寄格の２家）がなりました。一方、市江は、江戸時代から東保村（現 愛西市東保町）の宇佐美家と荷之上村（現 弥富市荷之上町）の服部家の２家が代々車屋を世襲しています。

宵祭、朝祭、神葭流し神事の祭様式について記します。

１、宵祭

津島五ヶ村と称された地域の経済が発展した戦国時代の１６世紀中頃から江戸時代中期の１７世紀中頃までの約 100 年の間に、雅な京文化が取り入れられ、提灯の数も１年の日数（陰暦）の 360 個、真柱（まばしら）には月数の１２個が飾られるようになりました。このように１８世紀初期に、今に伝わる尾張津島天王祭の祭様式が整いました。宵祭には市江は出船しません。

当時の蝋燭（ろうそく）は非常に高価でしたので、５艘でほぼ 2000 個もの提灯を飾った宵祭は、それだけでも人々にとって豪華な祭でした。

７月第４土曜日の宵祭の午前１０時に、神輿が津島神社から御旅所へ渡御（とぎょ）され、神が祭をご覧になります。この神輿渡御は明治１２年（1879）９月に天王川堤までの渡御が許可されていますので、翌明治１３年から行われたと考えられます。江戸時代の尾張津島天王祭の屏風、江戸時代の古書『大祭勘例帳』にも、

天王川への神輿渡御の記述はなく、江戸時代には天王川への神輿渡御はなかったと考えられますが、諸説あります。

津島の５艘の舟の飾り付けなどの準備作業は、すべて車河戸（くるまこうど）と呼ばれる池で行われます。祭河戸（まつりこうど）とも呼ばれます。この車河戸には４つの島があり、その上に屋形が置かれています。１つの島にだけ２台の屋形が置かれています。

宵祭は「試楽（しがく)」とも称されていました。宵祭が試楽であれば、朝祭が本祭ということになります。津島五ヶ村と称された今市場・筏場・下構・堤下・米之座の舟５艘に飾られた数多の提灯が、闇の中に浮かぶさまは言葉に表すことができないほどの幻

想的な美しさです。

この提灯を飾った舟は巻藁舟（まきわらぶね）とも試楽船とも呼ばれます。２艘の舟を横に並べ固定し一艘に仕立て、屋形を乗せます。これに長さ９間半（約１７ｍ）の真柱（まばしら）を屋形の横に取り付けます。これは如意（にょい）とも呼ばれます。その真柱に１年の月数の１２個の提灯を縦につけます。陰暦の閏年（うるうどし）には１３個の提灯が取り付けられます。これは、陰暦閏年には１３ヶ月あったからです。

屋形の屋根の上に、「坊主」といわれる半円球型の麦の巻藁台（幅 約 120 ㎝）を置きます。宵祭の提灯舟のことを巻藁舟と呼ぶのは、この巻藁台に由来しています。巻藁台には鉄枠があり、鉄枠に沿って、提灯をつけた長さ１丈（約３ｍ）の竹竿を坊主に刺し、山型半円球型にします。この鉄枠付き巻藁台こそが提灯を美しく並び付ける秘訣でした。この構造は永く村外秘でした。

提灯は１年の日数を表現しています。現在は 400 個ほどありますが、これは提灯竹の寸法が長くなるにともなって円周が大きくなり、提灯数を増やさないと隙間ができてしまうからです。

屋形前方には１月の日数の３０個の赤提灯を飾ります。これは「なべづる」と称されます。

屋形上部には軒提灯（のきちょうちん）を、屋形中段の四方には赤絹の４８個の絹灯籠（きぬとうろう）を提げます。提灯の中では、この絹灯籠が最も重要視されていました。提灯には蝋燭が必要ですが、灯籠では油、蝋燭いずれでも光源として使えます。提灯が未だ開発されていない室町時代以前に宵祭が行われていたならば、この絹灯籠のみが飾られていたと考えられます。

江戸時代の提灯の蝋燭は、大きさで３種類（現 ４種類）がありました。絹燈籠には大蝋燭（１５匁掛）で４８本（挺）、如意も大蝋燭（１５匁掛）で１２本です。大蝋燭は６０本になります。１年の日数を表わす提灯用の中蝋燭は７匁掛が 200 本、５匁掛が 150 本です。提灯を飾るとき、早い時間に飾る底部は７匁掛、上部は５匁掛蝋燭が使われました。赤提灯の「なべづる」用も、５匁掛蝋燭で３０本です。

午後７時、真柱に１２個の提灯の蝋燭に点火され、その後は 400 個余りの巻藁提灯に順次点火されていきます。

提灯を飾り終えた頃の午後８時に、津島神社の神官と尾張津島天王祭協賛会の代表者を乗せた２艘の赤船が「お迎え」に車河戸へ向かいます。挨拶と準備状況を確認した後、御旅所に戻ります。そして、巻藁舟の出船となります。

午後８時４５分、巻藁舟は車河戸から江口を通って天王川に出ます。津島笛による奏楽（太鼓・笛）が響き渡ります。先頭の舟（先車）は当番車が務め、毎年順次交代します。当番車がその年の祭の世話役となります。巻藁舟５艘は天王川をゆっくりと渡っ

て御旅所（おたびしょ）に至ります。

天王川には航路を示す３０本の「傍示竹（ぼうじだけ）」に提灯をつけて、川中に突き立ててあります。まず、先頭の当番車の車屋一行が上陸して御旅所の神輿に拝礼します。参拝が終わると舟に帰り、続いて各舟が着岸して拝礼します。終わって巻藁舟は再び車河戸に戻ります。

神輿渡御のなかった江戸時代には、車屋は佐屋代官らがいる桟敷（さじき）で挨拶をしました。尾張藩主が御上覧のときには御目見（おめみえ）しました。尾張藩の桟敷は天王川西堤の瑠璃小路にあり、竹矢来（たけやらい）で区切られていました。

宵祭が終わり、津島の５艘の巻藁舟が車河戸に戻ってくると、巻藁舟は夜どおしで朝祭の車楽舟に模様替えします。

朝祭の車楽は柱をすべて金襴（きんらん）で包んだ屋形の上に、金色金具のついた黒漆塗りの屋台をあげ、上段屋台と下段屋台にそれぞれ置物（おきもの）の能人形を安置します。そして朝を迎えます。

２、朝祭

朝祭の舟を「車楽舟（だんじりぶね）」あるいは「車楽」、「車（くるま）」といいます。一般的に「だんじり」は「壇尻・楽車・山車」ですが、尾張津島天王祭では「車楽」と漢字表記します。

朝祭では前夜の宵祭とは飾り付けを一変した津島の車楽舟５艘（津島五車）と市江の車楽舟１艘（市江車）が出ます。朝祭の先頭は市江の車楽舟と定められています。

米之座車楽舟

津島の車楽舟の置物（能人形）には決まり事がありました。

江戸時代、能は１日の興行で狂言をはさんで五番行われるのが本式でした。これを「五番立」といいます。能番組は、初番目物（脇能物）、二番目物（修羅物）、三番目物（鬘物）、四番目物（狂物・雑物）、五番目物（切能物）と５種類に分けられます。五番立

の番組は、この５種のグループからそれぞれ１曲ずつを選び、順に並べます。たとえば、脇能物の「高砂」を初めに置き、修羅物の「田村」をその次に置き、以下、鬘物の「羽衣」、狂物（雑物）の「隅田川」、切能物の「鞍馬天狗」が続く、という具合です。五番立は１日の番組で同趣の曲が重ならないようにするためです。

津島の車楽舟５艘の先頭を行く当番車の置物は「高砂（たかさご）」に定められていました。二番車の置物は二番目物（修羅物）の中から選ばれ、三番車以下も同様です。

市江の車楽舟は朱漆塗りの屋台をしつらえ、水面から大屋台の屋根までの高さは約１５ｍにもなります。

市江の車楽舟を例に、車楽舟の構造について説明します。

大型舟２隻を横に並べ角材を４本渡して「かすがい」で連結し、その上に「屋形（やかた）」を移し上げます。屋形は前方が「妻入（つまいり）」、後方が「平入（ひらいり）」の構造になっています。屋形後方に階段を取り付けます。以上が「山揚げ（やまあげ）」と呼ばれる作業です。その後、松を後部左右端に、若松を中央に立てます。

朝祭の早朝６時に「屋台起こし」を行います。屋形の上に「屋台」を置きます。屋形の上の前方に小屋台、後方に大屋台を引き起こします。大屋台と小屋台は「反り橋」で連結されます。大屋台の屋根は唐破風（からはふ）で、屋台中段に置物の能人形を乗せます。唐破風屋根は市江の車楽舟にのみ許されました。大屋台の柱は朱塗りです。大屋台と小屋台の下部は金襴の屋台幕で覆われています。屋形上部には金襴の軒幕を巡らし、この上に金襴や唐織（からおり）の豪華な小袖を逆さにかけます。これは「逆さ小袖幕」と呼ばれます。この逆さに懸けた小袖は、車楽舟の懸装品の中で最も重要視されています。

市江車楽舟

屋形の最前方には「神君様御寄附物」の立て札があり、桐箱が置かれます。桐箱の中には、徳川家康から寄進された金襴の着物が入っています。市江の車楽舟が徳川家康からの寄進物を持っているということは、江戸時代において絶対的な権威でした。

大屋台、小屋台の置物の２つの能人形は神の依代であり御神体と考えられていました。屋台はご神座であり、神聖な場です。

置物の人形は大屋台・小屋台の能シテ・ワキの２体です。市江では、朝祭１４日前に「置物定め」と称して、能２６番（江戸時代は 100 番）の中から神籤（みくじ）で、その年の置物（能人形）が選ばれます。朝祭８日前（陰暦６月７日）には「人形づくり」が行われます。木製の枠型に大麦の藁（わら）を肩・胴の部分に巻き付け、下衣を着せ、選ばれた能番組の衣装・指貫（さしぬき、袴）・能面・持物を人形に着けます。この人形は朝祭前日まで車屋宅に安置されます。

紅梅と白梅の大枝を屋形の屋根前方に飾りつけます。梅花の作り花は、紅紙と白

紙を鉄の花型で打ち抜き、八重咲きに貼り重ねたものです。この作り花は、尾張藩主がご覧になっていた時には、必ず献上されました。雷除けのご利益（りやく）があると伝えられています。

屋形中段には児（ちご）１人と囃子方（はやしかた）の楽打ち（がくうち、太鼓）１人、下拍子（したびょうし、締太鼓）３人、笛役と乗方衆などが乗ります。児は３歳から５歳の男子です。楽打ち・下拍子は９歳から１２歳で烏帽子（えぼし）を冠り、素襖（すおう）を着ています。児は、花烏帽子（花の付いた烏帽子）を冠り、大口（裾の口が大きい下袴）を着して、玉襷（たまだすき）を掛けています。玉襷は神霊が宿る襷の美称です。肩に丸撥をかつぎます。児は胸に鞨鼓（かっこ）を持っています。

午前８時４０分に、宵祭と同様に赤船による「お迎え」が行われます。午前９時に市江の車楽舟が車河戸を出船します。次いで津島の車楽舟５艘が当番車を先頭に順次、出船します。天王川に突き立てられている傍示竹は提灯から三幣に替えられています。

市江の車楽舟には鉾持（ほこもち）が１０人乗船しています。車河戸と御旅所の中程で、舟中から１０人の鉾持が登場します。鉾持は裸身（長さ９尺（270 ㎝）の晒の下帯）で、舟の前部に立てられている布鉾を各々が手にとり、布鉾の竹の根元を水中に差し入れ、この鉾竹から滴る「鉾汁」を口に受けて飲みます。そして、一番鉾は船首に立つと、背後から大柄杓で水を２回かけられ、布鉾を背負い水中に飛び込みます。古式泳法で御旅所まで泳ぎ渡ります。

次いで、二番鉾から十番鉾が順に飛び込み泳ぎ渡ります。御旅所前に泳ぎ渡った鉾持は、布鉾を捧げ持って御旅所へ上り、神輿に拝礼した後、布鉾を持ち御旅所から神社まで走ります。一番鉾と二番鉾は東鳥居をくぐり、拝殿ではなく社務所に入り布鉾を社

務所玄関に立てて奉献します。三番鉾は楼門前の反り橋に張られた注連縄（しめなわ）を切って、反り橋を渡って拝殿に進みます。そして、布鉾を立てて奉献します。四番鉾から十番鉾までの鉾持は、三番鉾と同様に布鉾を立てて奉献します。

市江　鉾持

市江の車楽舟は十番鉾が飛び込んでから、御旅所へと漕ぎ進み、午前９時４５分頃に御旅所に着きます。最初に、市江の献上持ちが車楽舟を降りて、献上物の紅白の梅花と神酒を神輿に奉献した後、児、車屋一行らが神輿に参拝します。

その後、津島の車楽舟５艘が順次、御旅所に着き神輿に参拝します。午前１０時３０分に神輿が御旅所から津島神社へ還御されます。神輿の後に市江、津島の米之座・堤下・筏場・今市場・下構の児、囃子方、車屋らが続きます。この還御は絵巻物を観るかのように美しい行列です。

津島神社では、市江と津島の当番車が神前奏楽を行い、宮司による児盃（ちごさかずき）の儀式などを行います。すべての儀式を終え、津島神社を出て車楽舟に帰ります。車楽舟は車河戸に戻り、朝祭は終わります。

朝祭が終わってから、「山おろし」が行われ、車楽舟から置物や幕類などの飾り物が降ろされ、次いで屋台、屋形が舟から降ろされます。諸道具は祭小屋や車屋宅に仕舞われます。

３、神葭流し神事

朝祭が終わり、津島の人々が寝静まった深夜午前１時に、灯火を全く消した暗闇の中で神葭流し神事が行われます。

神葭（みよし）には、「真の神葭」・葉付・人形（ひとがた）・四垂（したれ）・十二把物（じゅうにわもの）・六把物の６種類があります。最も重要なものは「真の神葭」で、牛頭天王の神霊の依代（よりしろ）です。本殿内陣に１年間奉斎されていた旧の「真の神葭」を新しい神葭に取り替えます。新しい「真の神葭」は台に取り付けられ、１２ヶ所を「こより」にて結び飾られています。

旧の「真の神葭」および本年に刈り取られ飾り付けられて外陣に安置されていた他の神葭は神社から搬出され、天王川御旅所下の赤船に乗せられます。赤船２艘を並べて青竹４本を渡したその上に、外陣の神葭を重ね、その上に旧の「真の神葭」を立て上部に御幣を、その下に白扇をくくり付けます。

赤船は天王川の中ほどに出て、２艘の船は左右に開かれて、神葭は放流されます。陸では、神主（宮司）以下が列拝し、放流の祝詞（のりと）を奏します。終わって一行は行列を組んで境外摂社市神社（米町）に巡拝し、古式の立神楽（たちかぐら）を奏します。帰路は再び天王川を経て神社へと戻ります。

神葭流し神事は尾張津島天王祭の本質で、疫神を流し去るという御霊会の儀式を伝える古式の神事です。

現在の神道思想では、神葭流し神事は人の犯した罪・科を神葭に託して流し去る儀式とされています。

津島の事前行事

尾張津島天王祭は創始以来、陰暦６月１４日に宵祭、１５日に朝祭が行われていましたが、昭和３８年（1963）から、７月第４土曜日に宵祭、翌日曜日に朝祭が行われるようになりました。

行事は尾張津島天王祭協賛会が執り行っています。

◇1月15日

・奉仕奉告祭（ほうしほうこくさい）

この年の尾張津島天王祭の奉仕を車屋らが津島神社の神前にて奉告します。

・車屋当番引継（くるまやとうばんひきつぎ）

当番車は、宵祭、朝祭で津島の舟５艘の一番車となり先頭を進みます。また、神社や他地区への種々の連絡などを行います。

・置物定め（おきものさだめ）

神籤（みくじ）で、その年の置物である能人形を定めます。籤は１２本で十二支に準じています。神籤に応じて一番車から五番車の置物が決められていますが、一番車の置物は「高砂」に定まっています。

◇朝祭１５日前（(陰暦5月31日）

・斎竹立（いみだけたて）

旧津島五ヶ村の各町の出入口に、注連縄（しめなわ）で結びつけた２本ずつの斎竹を、道路を挟んで高く立てます。斎竹は笹つきの竹です。笹が重要視され、神が憑くという観念です。

それぞれの地区の出入口の２ケ所に２本ずつですから４本で、五ケ村で斎竹の総数は２０本になります。さらに、車河戸にも立てられます。

斎竹の斎（いみ）は忌み清まるという意味です。斎竹を建てた時から、その地区は不浄・穢れを避けた神聖な場所であるということを表しています。

◇朝祭１４日前（(陰暦6月1日）

・稽古始（けいこはじめ）

お囃子の稽古を始めます。お囃子は笛・大太鼓（楽打ち）・締太鼓（下拍子）で構成されています。

◇朝祭１３日前（陰暦6月2日）

・船下し（ふなおろし）

車河戸の堤上に置かれていた舟（鉄製）を水面に下ろします。

◇朝祭３日前（陰暦6月１２日）

・船分（ふなわけ）

江戸時代には各地から舟は寄進されており、舟には新旧や大小のものがあったため、選ぶ際に争い事が起きるのを防ぐため、「神籤（みくじ）」で決めました。現在も、船分は古式にのっとり神籤で行われています。舟漕竿をもって待機していた人々は、くじで決まった舟に乗り、早漕ぎをして車河戸にむかいます。

・山揚げ（やまあげ）

車河戸に到着すると、２艘の舟をつないで１艘に仕立てます。島にある屋形の下に丸太をかけ、屋形を舟の上に引き上げて固定します。

◇朝祭２日前（陰暦6月１３日）

・児打廻し（ちごうちまわし）

児打廻しは、津島五ヶ村の児が「児かつぎ」の肩車に乗り、

午後７時頃に華やかな行列で車屋宅を出て、町内の氏神社に参拝してから車河戸へと向かいます。児は、祭期間中は地面を歩きません。必ず「児かつぎ」の肩の上に乗って移動します。車河戸では、児、囃子方、車屋らが乗船し、午後７時２０分頃にお囃子を奏でた後に、当番車の児を先頭に順次、津島神社へ向かいます。

午後８時頃に、津島神社の拝殿前に５本立てられた幕棒の周囲を、児らが３回廻って宵祭・朝祭の安全を祈願します。

◇朝祭前日（陰暦６月１４日）

・宵祭

午後８時４５分、数多の提灯を飾った巻藁舟５艘は順次、車河戸から江口を通って天王川に出て、宵祭が行われます。

・飾替え（かざりがえ）

宵祭が終わってから、翌朝の朝祭に備えて、「飾替え」が行われます。提灯を下ろし、屋形上の巻藁台も下ろします。そして、朝祭の車楽舟用の幕類を張り、屋台を揚げ、置物の能人形を置くなどして朝祭の車楽舟の装いに替えて、朝を迎えます。朝祭の幕は宵祭の幕よりも美しく高価な幕です。

◇朝祭当日（陰暦６月１５日）

・朝祭

朝祭では前夜の宵祭とは飾り付けを一変した荘厳華麗な津島の車楽舟５艘と市江の車楽舟１艘が出ます。

市江の事前行事

朝祭に向けての事前行事の多くは東保地区で行われ、市江車協賛会と尾張津島天王祭「市江車」保存会が執り行っています。

◇朝祭１５日前（陰暦５月３１日）

・斎竹立（いみだけたて）

市江の斎竹は、星大明社、東保町の出入り口である３ヶ所、車家の宇佐美家の計５ヶ所に立てられます。２本の斎竹には注連縄が張られ、１２枚の紙垂（しで）が下げられます。神酒を斎竹に注ぎ、洗米、鰹節をお供えします。古来、疫神や邪神が斎竹から中に入らないようにという意味合いがありました。

◇朝祭１４日前（陰暦６月１日）

・置物定め（おきものさだめ）（人形定め）

置物を神籤で決めます。現在の市江車置物２６番組は「高砂、三條小鍛冶、白楽天、還城楽、簸、鸚鵡小町、 猩々、海士、松風、鹿島明神、熊坂長範、安宅、烏帽子折、鞍馬、春日龍神、弓八幡、羽衣、紅葉狩、三輪、室君、東方朔、江之島、鉢木、蟻通、花筐、竹生嶋」です。置物は能のシテ・ワキの２体です。

・児定め（ちごさだめ）

児役を定めます。児（稚児）は花烏帽子を冠り、華麗な装束を着て、玉襷をかけ丸撥２本を肩にかつぎ、胸に鞨鼓（かっこ）を持ちます。児のほかに奏楽の楽打ち（太鼓）１人、下拍子（締太鼓）３人が定められます。

・花切（はなきり）・枝切（えだきり）

花切は、車楽舟の屋形左右の前方に飾られる紅白の梅花と朝祭に御旅所の神輿に献上する紅白の梅花を作る行事です。紅白の紙を鉄の花型で打抜き、切り花を作ります。枝切（えだぎり）

もこの日に行われます。

◇朝祭８日前（陰暦６月７日）

・本清火入り（ほんせいかいり）

前日に清火札貼りが行われ、車屋はこの日から本清火に入ります。清火でおこした別火（べっか）で食物を調理して食べます。

・鉾刷ぎ（ほこはぎ）

鉾刷ぎは、鉾を作る作業です。市江の車楽舟に乗っている鉾持１０人は布鉾（ぬのほこ）を津島神社に奉献します。布鉾は、約３ｍの青竹の上部を割り、剣型（けんさき）３本を差し挟んで麻の紐で縛りつけます。その下に直角に約６０㎝の竹を麻紐でしばり、晒（さらし）を折り返し、二重にして取り付けます。

◇朝祭７日前（陰暦６月８日）

・人形作り（にんぎょうづくり）

「置物定め」で決められた能人形（シテ・ワキの２体）が車屋宅で作られます。木枠の骨組である人形台に頭を取り付け、麦藁で胴体の輪郭を作り、面・衣装を着せます。

・花合（はなあわせ）・花附（はなつけ）

花切で作られた切り花を、もち米を粉にしたものに黄色の粉を混ぜて作った糊（のり）で、八重に貼り合わせ作る作業です。花附では、八重の花を枝に附けます。

◇朝祭２日前（陰暦６月１３日）

・お祓い（おはらい）

児、車屋らが正装し、祭関係者とともに氏神の八幡神社（愛西市東保町宮越）に参詣します。

◇朝祭１日前（陰暦６月１４日）

・御神供蒸し（おみおくむし）

小豆入りの餅米を蒸しあげ、御神供として丸く握られ、行器（ほかい）に納められます。朝祭終了後には「お下がり」として関係者に配られます。

・献上物作り（けんじょうものづくり）

献上物は、酒、洗米と紅白の梅花（作り花）です。梅花は雷除けに効験があるとされています。

・山揚げ（やまあげ）・飾付け（かざりつけ）

翌日の朝祭の車楽舟の準備です。天王川の車河戸で舟に屋形が載せられます。そして飾り付けが行われます。

・星宮神事（ほしのみやしんじ）（星宮試楽（ほしのみやがく））

宵祭が行われる日ですが、市江は宵祭には出ません。市江では星宮神事が行われます。

星大明社（愛西市西保町宮西）の拝殿奥に「神君様御寄附物（徳川家康の寄進品）」と置物人形が置かれ、拝殿の外には紅白の梅花、布鉾が並べられます。車屋・児・囃子連中などの祭関係者が星宮に参入し、拝殿では奏楽が行われます。これは「星宮試楽」と称されています。奏楽が終わると、児膳（ちごぜん）が出されます。その後、津島の天王川へ出立します。天王川車河戸に着くと車楽舟に乗船し、奏楽が行われます。

◇朝祭当日（陰暦６月１５日）

屋台起し行事が行われ、すべての準備が終わると、児、車屋、奏楽らが車楽舟に乗りこみ、津島神社の「お迎え」を待ちます。午前９時に市江の車楽舟が車河戸を出船します。

尾張津島天王祭の創始

尾張津島天王祭の始まった年代については、いろいろな説がありますが、確かな史料がなく、現段階では創始年代は明らかではありません。 現存史料としては『大祭筏場車記録』（たいさいいかだばぐるまきろく）があります。それには大永２年（1522）からの車楽舟の置物人形などが記されていることから、１６世紀初期以前に祭が行われていたことが分かります。当時の津島は商業経済が発達した「津島五ヶ村」という自治組織「惣（そう）」でした。

これらのことから尾張津島天王祭の始まった年代は１５、６世紀とされていますので、500 年以上の歴史があります。

祭が始められた中世には、朝祭と神葭流し神事は行われていましたが、当時は宵祭で飾る「提灯（ちょうちん）」がなく、江戸時代とは異なった宵祭様式であったと考えられます。

年代的には、「神葭流し神事」が最も古くから行われ、車楽舟による「朝祭」、次いで提灯をつけた巻藁舟による宵祭が始められるようになりました。

中世の尾張津島天王祭は、現在のような華麗な祭ではなく、当初は質朴な祭であったと考えられます。祭を豪華にするには、地域の経済力が豊かでないとできません。また高い文化水準、信仰と祭への情熱が必要です。これらが揃わなかったら、華麗な祭を創造し、継続することはできません。

津島五ヶ村と称された地域の経済が発展した戦国時代の１６世紀初期から江戸時代中期の１７世紀中頃までの約 150 年の間に、祭を観に来る人々を意識し、更に美しくしようと積極的に風流を取り入れた結果、１８世紀初期に、今に伝わる尾張津島天王祭の様式が整いました。

織田信長も見た尾張津島天王祭

戦国時代の津島は「尾張の金銀はすべて津島を経由する」といわれ、尾張有数の商業都市（湊を基盤とした町）でした。勝幡城（しょばたじょう）を拠点とする織田弾正忠家（だんじょうのじょうけ）と称された織田信定（おだのぶさだ）・信秀（のぶひで）・信長（のぶなが）の家系は津島の経済力を背景に勢力を伸長し、信秀の頃から主家の清須織田家をしのぐようになりました。

当時の津島は湊町でした。伊勢の桑名、尾張の熱田、知多半島の大野などの湊、さらに木曽三川沿岸部を繋いでおり、様々な物資と人と銭が流通していました。日本史研究者は、織田信秀、信長の尾張での勢力伸長の源は津島と熱田を支配し、金銭を調達していたからであるという点で一致しています。

そして、信長は尾張国を統一し、全国制覇をめざしました。信長の産土神（うぶすながみ）は津島牛頭天王社ですし、津島牛頭天王社の神紋は信長と同じ木瓜紋（もっこうもん）です。信長の天下布武は津島から始まったといっても過言ではないでしょう。

『信長公記』に拠れば、弘治３年（1557）には津島を訪れて、堀田道空宅で風流踊（ふりゅうおどり）を天女の姿で踊りました。

『大祭筏場車記録』の弘治４年（1558）には「上総介様（信長）は天王橋の上で御見物された、女房たちは橋の近くの桟敷に座られた」と記されています。織田信長が天王川に架かっていた天王橋から祭を見物したことが分かります。

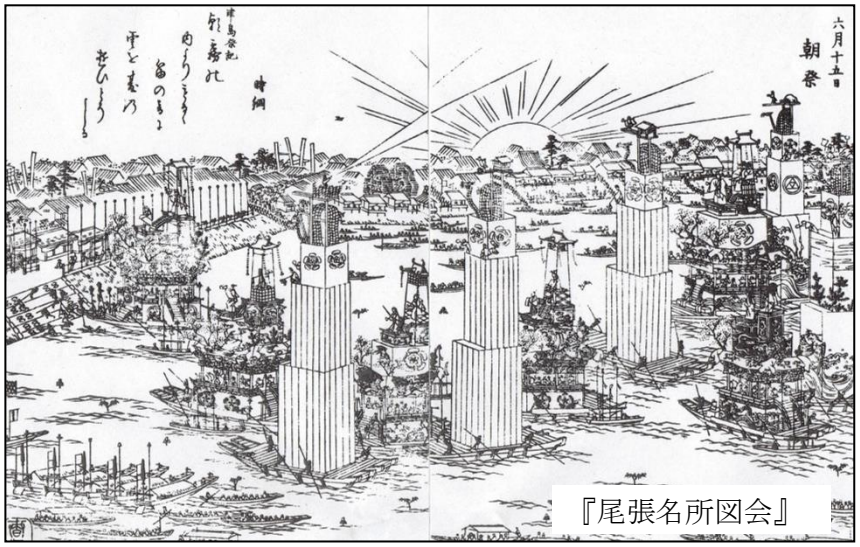
信長は天正１０年（1582）６月２日、「本能寺の変」で明智光秀

の謀反で自害しました。『大祭筏場車記録』の天正１０年の条には「六月二日、明智（光秀）が謀叛をおこし、上様（信長）と殿様（信忠）が亡くなられた。そのため十四日まで祭の準備をしなかったが、十四日に台尻（車楽）だけ、なにも飾らずに「すぐるま」（素車）で江口まで渡した。十五日も同じようにして、天王橋まで渡った。堤下・米之座も「すぐるま」で、台尻（車楽）だけで渡った」（現代語訳）と記されています。飾り物をなくし「素車」で祭を行い、弔意を表したことが分かります。

豊臣秀吉（とよとみひでよし）も津島と深い関わりがあります。秀吉は、淀川で尾張津島天王祭を行おうとしたと伝えられます。

歴代のほとんどの尾張藩主が尾張津島天王祭を見物しました。

初代藩主徳川義直は、万治２年（1659）に御深井で津島の宵祭を模した祭舟を出しました。２代藩主徳川光友は、御座船を天王川まで廻漕し、尾張津島天王祭を見物しました。



『尾張名所図会』

尾張藩の藩祭 尾張津島天王祭

江戸時代には尾張津島天王祭を行うにあたって、尾張藩から「三通物（みとおりもの）」すなわち米・竹・舟の寄進がありました。

（１）米

尾張藩は尾張津島天王祭の祭料（執行費）として、津島には米５０石（こく）を寄進しました。さらに、天王車田は約１４町５反（石高 152 石余）ありました。これは年貢免除地で、その年貢相当分を祭礼費用に充当しました。市江は、車田として５町４反余（石高５３石９斗余）を拝領していました。

（２）竹類

尾張津島天王祭で津島が用いる斎竹２０本、船竿竹８０本、蛇骨竹（じゃこつだけ）５０本、提灯竹 500 本、山結竹（やまゆいだけ）2500 本は尾張藩支配の村々から寄進されていました。津島の斎竹は美濃兼山（可児市）から１０本、長良（岐阜市）から１０本が寄進されていました。

市江は、斎竹４本、鉾竹１０本、船漕竿１２本が寄進されていました。斎竹は美濃国の円城寺村（岐阜県笠松町）、鉾竹・船漕竿は苅安賀村（一宮市大和町苅安賀）から寄進されていました。

（３）舟

津島の舟は５０～６０石船で、数は２０艘が寄進（貸与）されました。車楽舟と大山舟は２艘を平行に繋ぎあわせて１艘仕立てにしますので、２０艘で車楽舟５艘、大山舟５艘分になります。

名古屋３艘、鳴海１艘、南野１艘、熱田２艘、今村２艘、蟹江４艘、戸田１艘、佐屋２艘、津島４艘の合計２０艘です。

市江の舟２艘（車楽舟１艘分）は、100 石船でした。濃州三ケ湊（現 養老町）か寄進されました。市江は大山舟を出しません。

大山舟

江戸時代には、朝祭では市江の車楽舟を先頭に津島五ヶ村の車楽舟と大山舟（おおやまぶね）の各々５艘、総計１１艘が天王川を渡りました。市江からは大山舟は出ません。大山舟は、「山車（やまぐるま）」「大山」とも呼ばれていました。

『張州雑志』

大山舟は車楽舟と同じように舟２艘を繋げて１艘に仕立てたものです。船の上に３段の山（高さ１２．６ｍ）を組み上げ、さらにその上に野山（高さ１．８ｍ）と人形柱（３．６ｍ）と屋台（１．８ｍ）を組んで、全体を華麗な幕でおおいます。

高さは約２０ｍもあります。２段目の山（二の山）の前部の上に翁・媼（アシナヅチ・テナヅチ）の人形が置かれます。屋台の上には「からくり人形」が置かれました。

先頭の大山舟の人形は「鉄砲打ち」と定められていました。大山舟のからくり人形としては、鉄砲打ち、湯取神事、稲荷、猩々、神子、音羽、戸隠明神、住吉などがありました。その下に作り物の大蛇、大きな鯛と鯉を置きました。

残念なことに、明治新政府の廃藩置県の影響で尾張藩からの助成がなくなったため、大山舟は明治６年（1873）に経済的な理由で廃止されました。

古典芸能と尾張津島天王祭

狂言の演目に「千鳥（ちどり）」があります。これには「津島祭」の話が出てきます。

「太郎冠者は主に酒を求めて来いと命じられて酒屋へ行くが、酒代がたまっているため売ってもらえない。今回分の代金は持ってきたなどと言い、すきを見て樽を持って行こうとするが、止められる。太郎冠者は津島祭を見物に行った話を始め、樽を千鳥に見立てて子供が千鳥を伏せる様子や、山鉾を引く様子、祭後の流鏑馬（やぶさめ）神事の様子などを、仕方を交えて話し、相手がそれにつりこまれているすきに樽を持って逃げる」

この狂言「千鳥」に、「つしままつりはおもしろいことじやとききおよふだが おもしろいか」と語られているように、津島祭は室町時代末期から江戸時代初期には全国的に知られていたことが分かります。

津島祭は能楽にも取り入れられています。

能管（のうかん）には「一管（いっかん）」といって、囃子事や短い楽曲を能管で独奏する形式があります。一管は笛の流派、森田・一噌・藤田、各流派とも重い習い事としていますが、なかでも「津島」は秘曲、大曲としてどの流派でも大切に扱ってきました。「津島」は津島祭の祭礼囃子を取り入れた曲です。

戦国時代、織田信長の近習に伊藤安中という人物がいました。この伊藤安中は「信長の笛役」とまで言われた笛の名手であり、津島祭囃子「津島笛」を広めた人物とされています。この「津島笛」を基に、能管の曲目に「津島」が加えられたのです。

絵師が描いた尾張津島天王祭

江戸時代、尾張津島天王祭は全国有数の祭礼となりました。江戸時代の華麗な尾張津島天王祭を描いた絵画は、屏風・絵巻・版画・団扇絵など多岐にわたっています。

版画では初代歌川広重（うたがわひろしげ）が描いた『六十余州名所図会（ろくじゅうよしゅうめいしょずえ）』の「尾張津嶋天王祭り」（宵祭図）、２代目広重が描いた朝祭図が広く知られています。

広重「尾張津島天王祭」

尾張津島天王祭の屏風は金雲極彩色で描かれ、その精緻さと華麗さは観るものを驚かせます。尾張津島天王祭を描いた屏風は、現在９点の存在が確認されていますが、他にも秘蔵品があると考えられます。海外所蔵品はイギリスの大英博物館・フランスのギメ国立美術館・アメリカのカウンティ美術館の３点、国内所蔵品は６点ほどあり、名古屋の徳川美術館、京都の西本願寺、名古屋市博物館など、そして２点は津島の２家に所蔵されています。

『南総里見八犬伝』などを著した曲亭馬琴（きょくていばきん）は、尾張津島天王祭を見物し、「このような大河に大船をうかべて、二千個の提灯を飾っているので、その光が水に映って、まるできらめく星のようである。見物の人々は川の左右堤防の桟敷から、あるいは船から祭を見ている」（現代語訳）と『蓑笠雨談（さりつうだん）』に記し、その美しさに驚嘆しています。

明治以降の尾張津島天王祭

慶応から明治に改元された 1868 年、明治新政府は神仏分離令（しんぶつぶんりれい）と神職の世襲禁止、社領の廃止を命じました。津島牛頭天王社では明治元年（1868）に仏教に関わるもの全てが境内から撤去され、翌２年に津島神社と改称しました。神主家、神官家（社家）の多くは世襲禁止により、明治以降に津島を離れました。さらに、明治４年（1871）に廃藩置県（はいはんちけん）が行われました。尾張藩からの米・舟・竹の「三通物」の寄進も全てなくなりました。

明治時代の尾張津島天王祭は津島神社からの補助金と氏子らの協賛金で賄われ、私費祭になっていました。尾張津島天王祭を行う財政はひっ迫し、やむなく明治６年（1873）には朝祭の大山舟５艘が中止になり、現在の朝祭様式になりました。

また、明治３２年（1899）には佐屋川が廃川されました。現在のように、天王川が丸池として残ったのは、尾張津島天王祭を行うためでもありました。その背景には、地域の人々の祭にかける情熱がありました。

太平洋戦争の戦時下の昭和１９年（1944）と翌２０年および終戦後の昭和２１年、この３年間は、尾張津島天王祭は神事のみが行われ、宵祭と朝祭は中止されました。祇園祭の山鉾巡行も昭和１７年(1942)から昭和２０年までの４年間は中止されました。

500 年以上もの間、津島と市江の人々が祭文化を大切に次世代に伝え続けた結果、昭和５５年（1980）に「尾張津島天王祭の車楽舟行事」は国指定重要無形民俗文化財になりました。

そして、平成２８年（2016）にユネスコ無形文化遺産に登録されました。